様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０５１８７

研究課題名（和文）EU都市部の衰退地区における「ソーシャル・ミックス」の社会学的研究

研究課題名（英文）Impact of Social Mix Policies in European Inner Cities

研究代表者
森　千香子（Mori, Chikako）

一橋大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：１０４１０７５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1990年代以降、階層分極化が顕著になり、住民の社会的排除が悪化したEUの衰退地域の状況を打破する目的で、都市政策で新たに重視されるようになった「ソーシャル・ミックス」の概念に注目し、（１）その枠組みで行われる政策の具体的内容と意義、（２）同政策が地域社会や住民コミュニティにもたらした社会的帰結、の2点について、フランス（パリ・リヨン郊外）、スペイン（マドリード）、イギリス（ロンドン）での現地調査に基づいて分析を行い、同政策が脱セグリゲーションで一定の成果をあげる一方、地域社会の紐帯基盤の脆弱化、住民の個人化も引き起こしていることがわかった。

研究成果の概要（英文）：Since the 1990s, social mix policies have been conducted in several European cities as a solution to the social exclusion and economic inequalities in dilapidated neighborhoods. This project evaluated the impacts of these policies in France (Paris and Lyon's suburb), Spain (Madrid) and United-Kingdom (London). Our survey showed that these policies had the effect of reducing ethnic segregation but also weakening social ties, fragmenting the local community which was an important resource for residents.

研究分野：社会学

キーワード：　都市社会学　マイノリティ　貧困　EU　衰退地区　移民

１．研究開始当初の背景

1970 年代以降、低成長期に入った西ヨーロッパ都市部では貧困問題が再燃し、「社会的排除」の現象が観察され、1990 年代には各地で「都市問題」として深刻化した。公営住宅に低所得層エスニック･マイノリティが集住し「衰退地区」が形成され、失業・学業挫折・福祉受給・犯罪率などが問題化していることに注目し、セグリゲーションの背景を分析する研究が、社会学を中心に行われてきた。一方、衰退地区の住民を包摂し、社会的結束を取り戻すにはローカル、ナショナル、トランスナショナルなレベルでどのような政策をとるべきかという政策論的研究も進んだ。

このような変遷を経た EU の都市政策論で特に 2000 年代以降注目されたのが「ソーシャル・ミックス（social mix）」概念だった。同概念の原型はアメリカ合衆国の黒人貧困地区対策をめぐる議論にあるとされ、日本でも近年、橋本健二が『階級都市』(2012)で「教育格差の縮小」や「異文化間の相互理解促進」などの利点を強調してきた。それに対し、こうした政策が中産階級の転入と「ジェントリフィケーション」を引き起こし、下層階級の「エヴィクション(eviction)」や都市周辺部への排除につながる可能性も指摘されてきた。「ソーシャル・ミックス」について相反する仮説が存在しており、それらを事例に基づいて検証する作業は政策の有用性を評価する上でも不可欠だ。だが先行研究では観念的議論が先行し、具体例に基づいた実証研究は、問題提起的なものをのぞいては、管見のかぎりおこなわれていなかった。

２．研究の目的

本研究は都市社会学だけでなく、教育、政治、宗教社会学の研究者との共同研究を通して「ソーシャル・ミックス」が衰退地区の住民に及ぼす影響を多角的に分析することをめざした。

目的は以下の３つに焦点を絞った。第一に調査対象４地区の基本データを収集し、比較分析の枠組みを構築した。具体的には a）４地区の現状の多角的な把握・整理、b）４地区で行われてきた都市政策の内容と背景を検討することだった。

第二に４地区で「ソーシャル・ミックス」概念が政策に導入された文脈と過程、具体的な政策内容を把握することだった。

第三に４地区で「ソーシャル・ミックス」政策が a)居住空間、b)学校、c)市政参加、d)多文化共生、の４領域でどのような社会的帰結をもたらしているかについて現地調査を通して検討し、それを「成果」と「問題点」の両側面から考察した。そして「ソーシャル・ミックス」をめぐる相反した仮説（楽観論と悲観論）を検討し、同概念の今日的な意義と課題について再評価を試みた。

３．研究の方法

本研究は、フランス（パリ郊外、リヨン郊外）、スペイン（マドリード）、イギリス（ロンドン）での現地調査が中心となった。ソーシャル・ミックスの実態を a)居住空間、b)学校、c)市政参加、d)多文化共生の四領域に絞った。

2015(平成27)年度は5月にパリとマドリードで研究打ち合わせと予備調査を開始した。マドリードに拠点をおくフランス国立研究機関カサ・デ・ベラスケス(Casa de Velazquez)の都市研究メンバーとワークショップ Marges, territoires urbains et circulations を行い、近年の都市周縁層分析理論が本研究計画においてどの程度有効であるかを議論し、またマドリードの衰退地区を訪問し、調査協力者との打ち合わせを行った。また６月に、当初の研究計画に影響を与える政策変化が発生したため、分担者と合意の上で、夏に予定していた本調査を冬に延期した。

ところが 11 月にフランスで同時多発テロ事件が発生し、非常事態宣言が発令された。フランスの海外研究協力者と連絡をとり、現地の最新の状況をリポートしてもらい、予定通りに調査を進めることが難しくなったと判断し、本調査を 2016 年夏に繰り越すことを決定した。ロンドンとマドリードにおいては海外研究協力者の協力のもと予定通りに本調査を実施した。

2016(平成 28)年度は、パリ郊外とリヨン郊外にて、2015 年度の繰越分の調査を実施し、前述の四領域におけるソーシャル・ミックスの実態についての聞き取り調査を各自が行った。帰国後には各自がテープ起こし作業を行い、データの整理を進めた段階で、代表者、分担者、協力者で研究会を開き、データのシェアと進捗状況について確認した。同年 7 月に再びテロ事件が発生した影響で、非常事態宣言が延長され、一部の調査対象地区では厳戒態勢が敷かれた影響で、それぞれの調査領域で遅れが生じたため、当初の予定より海外協力者への協力依頼部分を増加することを決定した。それをふまえて分担者は 2 月から 3 月に渡欧し、海外研究協力者と会合をもち、追加調査の必要を議論し、協力を依頼した。また代表者は、フランスで調査実施が困難になった領域に関し、当該分野を専門とするプリンストン高等研究所のディディエ・ファッサン教授と面談し、今後の調査に対する助言を受け、同研究所員の協力を受けることとなった。

2017(平成 29)年度は、これまで蓄積したデータを検討するとともに、追加調査を実施し、当該地区におけるソーシャル・ミックス政策の影響について検討した。また関連領域の専門家と意見交換を重ね、成果の一部を年度末にフランスで発表し、成果の刊行にむけて準備をすすめた。

前半は、研究代表者、分担者、協力者が 2 回の研究会を開催し、各自が 2016(平成 28)

年度までの調査で得たデータを共有し、居住空間、学校、市政参加、多文化共生、の４領域でソーシャル・ミックス政策の展開に看過できない違いがあることを確認した。研究科での議論を文書化し、各メンバーと共有した上で、分担者、協力者、海外研究協力者とインターネット会議を開き、ソーシャル・ミックス政策が地域に引き起こした変化を調査地区別に検討し、それをもとに比較分析の枠組みの構築を進めた。

8 月から 9 月にかけて分担者は最後の調査を実施した。代表者は研究会とインターネット会議で議論した内容をふまえて、三ヶ国のソーシャル・ミックス政策の内容、意義、帰結を比較検討し、理論化の作業をすすめた。作業は、複数のソーシャル・ミックス研究の専門家に助言を仰ぎながら進めた。

さらに 3 月にはフランスで二度にわたって成果報告のワークショップを開催した（パリ８大学、Camargo Foundation）。そこで行われた討論の内容をふまえ、成果の書籍化を目指すことをメンバー間で確認し、実現に向けてのスケジュールを確認した。

４．研究成果

四地域で実施した現地調査から、いくつかの知見が引き出された。第一に、「ソーシャル・ミックス」政策の実施される地域的特色には共通点が多いものの、行われる政策の内容は、地域ごとに相違がみられることが確認された。フランスの場合、老朽化団地の取り壊しと新たな集合住宅の再建という建物のハード面に特化した政策が顕著であった。それに対し、マドリードでは社会住宅の入居者の国籍やエスニシティなどの属性に基づいた比率の適正化という住民配置の側面を持つ傾向が確認された。ロンドンでは、フランスのような団地の取り壊しという側面を持ちつつも、フランスのように公共セクターではなく民間主導のダイナミズムが大きな影響を持っていることが確認された。

第二に、調査を行った四つの領域において政策が異なるかたちで影響を及ぼしていること、またソーシャル・ミックスの達成度に大きな差異の存在することがわかった。具体的には居住空間におけるソーシャル・ミックスに対して、どの地域でも政策のウエートが大きく偏っていることがわかった。

第三に、一見、各地域に共通する「現状」が異なったダイナミズムの帰結であることが確認された。フランスでは以前より、ソーシャル・ミックス政策が居住空間に大きな比重を置く傾向がみられた。ところが、イギリスにおいてはそれまでは「社会的包摂」の一環として対象とされてきた市政参加や宗教の領域でも行われていたのが、一連の「テロ事件」や「暴動」の発生を通じて、「多文化主義政策」の後退がみられるようになり、それと呼応するかたちで、これらの領域でのミックスに配慮した政策も後退する結果となったことが確認された。

第四に、ソーシャル・ミックス政策はどの地域でも脱セグリゲーションにおいては一定の効果が認められたが、その一方で、地域社会の紐帯基盤を脆弱化させる傾向も確認され、それが結果的に住民の「個人化」を引き起こしていることがわかった

このように本研究は、ソーシャル・ミックス研究に政策帰結の国際比較という見地から切り込み、一定の展望を示した。成果は複数の論文、図書、学会発表として公開した。なかでも研究代表者が発表した『排除と抵抗の郊外』は渋沢・クローデル特別賞、大佛次郎論壇賞の二つを受賞し、高い評価を受けた。

また本研究は、マドリードに拠点をおくカサ・デ・ベラスケスや衰退地区研究の国際ネットワーク Advanced Urban Marginality、パリ第８大学、パリ政治学院など複数の海外研究機関の研究者と協力して調査やデータ分析を進め、海外研究体制の強化という点でも成果をあげた。構築されたネットワークを基盤に新たな研究計画が予定されている。

本研究はヨーロッパの事例を扱ったが、その射程はヨーロッパ研究の範疇にとどまらない。日本の都市部でも階層ごとの棲み分けがすすみ、地域間格差が増大し、一部の地域では貧困層や外国籍住民の集住が観察されている。本研究はこのように日本社会が直面する課題をふまえ、「排除を生まないまちづくり」に向けた知見を提示し、政策提言への手がかりを示すことを目指し、その一部は全国紙への寄稿などというかたちで公開した（cf. 森千香子「働きに行きたい国めざせ」日本経済新聞 2017 年 3 月 29 日、森千香子「都市同盟　内向きな国にのぞむ」朝日新聞 2017 年 6 月 27 日、森千香子「多様なルーツ、新たな活力」朝日新聞 2017 年 12 月 21 日）。このように本研究は「日本社会への還元」という重要な社会的意義をもっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　9　件）

1. 森千香子「黒人が姿を消していく街：移民の街・ニューヨークの再編と居住をめぐる闘い」『UP』、査読無、47 巻 4 号、2018 年、pp.34-39。
2. 中野裕二「フランス都市政策優先地区における「市民評議会（conseil citoyen）」制度の創設」『駒澤法学』、査読無、17 巻 2・3・4 号、2018 年、pp.78-57。
3. 南波慧「欧州域外国境における人道危機の安全保障化――海難救助活動とブローカーとの闘い――」『グローバル・ガバナンス』、査読有、4 号、2018 年、pp.80-93。
4. 園山大祐「『移民系フランス人』の学業達成と庶民階層にみる進路結果の不平等――中等教育内部にみる自己選抜と周縁化のメカニズム――」『現代思想』、査読無、45-7、2017 年、pp.184-198。
5. 南波慧「EU 国境地域における〈境域〉のポリティクス――欧州移民規制レジームの構

築とチュニジア人難民――」『境界研究』、査読有、7号、2017年、pp.45-70。DOI:10.14943/jbr.7.45
6. 浪岡新太郎「フランス共和国における<ムスリム女性>の解放――政府統合高等審議会(Haut Conseil à l'Intégration: HCI)におけるライシテの語り――」『国際学研究』、査読有、50号、2017年、pp.39-62。
7. 中野裕二「比較国民国家論のための論点整理――フランスの「政治的なるもの」の研究から――」『駒澤法学』、査読無、15巻3・4号、2016年、pp.60-39。
8. 田邊佳美「『ムスリム女性』とイスラーム・フェミニスト――フランスにおける普遍主義と当事者性――」、『女たちの21世紀』、査読無、第85号、2016年、pp.24-27。
9. Chikako Mori "Heterogeneidad e Inestabilidad: Otra Perspectiva del Suburbio Japonés (Heterogeneity and Instability: Another View of Japanese Suburbs)", RECEI - Revista Científica de Estudios sobre Interculturalidad, Vol. 1(1), 2015（査読有）,pp.3-11.

〔学会発表〕（計46件）
1. Chikako Mori "Rethinking the "Unsuccessful Gentrification" and the Role of Community in Marseille: Contributions to Comparative Sociology of Gentrification in France" Camargo Core Program Project Discussion,2018.
2. 森千香子「都市社会における「共生の危機」と克服への取り組みに関する比較研究」境界研究会、2018年。
3. Chikako Mori "The Securitization of migrants and the rise of anti-immigrant attitudes: the role of the state and immigration policies in France", The Global Refugee Crisis: Mobile People under State Protection or Exploitation? National University of Singapore,2018.
4. 中野裕二「統合高等審議会の言説変化にみる「共和国モデル」の変容」、シンポジウム「フランスにおける移民統合の「共和国モデル」：意義と変化と問題点」、2018年。
5. 南波慧「構造的暴力としてのEU国境管理レジーム」新学術領域研究「グローバル関係学」若手研究者報告会、早稲田大学、2018年。
6. Satoru Namba, "Re-uprooting against Refugees: Political Consequence of the Demolition of the "Jungle" in Calais," Kobe Seminar 2018, The JSPS Core-to-Core Program (A. Advanced Research Networks), 2018.
7. 森千香子「「分断する社会」どのように形成されるのか」生存科学研究所主催第5回シンポジウム、2017年。
8. 森千香子「新自由主義時代における『変革』とは何か–現代フランスにおける格差・マイノリティ・労働フェアレイバーセンター」法政大学大学院フェアレイバー研究所第1回公開講座、2017年。
9. 森千香子「現代フランスにおける貧困・移民・都市―マクロン時代の分断社会」大佛次郎研究会、2017年。
10. 森千香子「「ホームグロウン・テロ」とヨーロッパの移民問題」第472回監査懇話会、2017年。
11. 森千香子「移民・難民危機とEU都市」第8回一橋大学中部アカデミア シンポジウム「グローバリズムとナショナリズム――BREXIT、トランプ政権、そしてEUの運命は――」、2017年。
12. 森千香子「「難民・移民危機」と欧米都市部における共生の危機・克服――パリ市における「難民・移民キャンプ」の事例から」グローバル関係学研究会、2017年。
13. 森千香子「フランスにおける「ムスリム女性」表象の変容――「哀れみの身体」から「狂暴な身体」へ」国際シンポジウム「イスラモフォビアの時代とジェンダー」2017年。
14. 森千香子「移民集住地域における政治的行為の展開・背景と公共政策への影響」第五回ヨーロッパ研究会、2017年。
15. 森千香子「激動のフランスをどう見る?」第4回「たそがれ時の談話室」日仏メディア交流協会、2017年。
16.森千香子「都市における「共生の危機」の比較社会学の可能性」歴史学研究会大会・現代史部会「都市の「開発」と戦後政治空間の変容」、2017年。
17. 森千香子「ジェントリフィケーションと排除・抵抗・共生――ニューヨーク市ブルックリンの事例から」語研例会第282回、2017年。
18. 森千香子「ホームグロウン・テロと二つのポピュリズム――ヨーロッパで何が起きているのか」一橋フォーラム、2017年。
19. 森千香子「反グローバル・反移民・両極？「ポピュリズム」をめぐる三つの誤解と建設的批判の地平」、21世紀政策研究会、2017年。
20. 園山大祐「フランスにおける教育の大衆化と学校選択――階層間格差の固定化と進路選択の過熱化に注目して――」日本教育行政学会第52回研究大会課題研究Ⅰ「現代教育における多様化と包摂の交錯」、2017年。
21. 村上一基「統合高等審議会報告書（1991～2013年）にみる移民のフランス的統合（5）――＜第二世代＞と＜女性＞の社会経済的統合と公共政策へのアクセス――」日本社会学会、東京大学、2017年。
22. 野村佳代、南波慧、田畠佑実子「統合高等審議会報告書(1991～2013年)にみる移民のフランス的統合(2) ――「受入統合契約」導入インパクトを考える」日本社会学会、2017年。
23. 南波慧「英仏国境における難民危機–「ジャングル」解体をめぐる〈欧州〉の可視性と不可視性」国際政治学会、2017年。
24. 南波慧「欧州域外国境における人道危機

の安全保障化――海難救助活動とブローカーとの闘い」グローバル・ガバナンス学会、2017 年。
25. 浪岡新太郎「フランスにおける多文化共生と難民危機――「過激化」の観点からのムスリムへの政策的対応」日本政治学会部会「A1 難民危機と多文化主義―理論と事例」、2017 年。
26. 浪岡新太郎「フランスにおける宗教的多元主義と過激化――エスニックブラインドな共和国モデルから治安の多文化主義へ」日本国際政治学会部会 11「『帰属の政治』の現状と展開――理論と実証研究の対話を通じて」、2017 年。
27. 浪岡新太郎「統合高等審議会報告書（1991 ～ 2013 年）にみる移民のフランス的統合（4）： ムスリムアイデンティティをめぐる統合政策の変化を中心として」（エレーヌ・ルバイユパリ政治学院専任研究員と共同）日本社会学会、2017 年。
28. 森千香子「移住家事労働者とワーカーズ・コーポラティブ――ニューヨーク市の事例」国際シンポジウム「移住・家事労働者の権利保障と IL0189 号条約――アジア、ヨーロッパ、アメリカ、そして日本―家事労働者」、一橋大学、2016 年。
29. 森千香子「フランス共和主義のダブルスタンダード――在仏ムスリム差別の特殊性」日仏社会学会大会シンポジウム、2016 年。
30. Chikako Mori “What are the Impacts of Residential Segregation of Brazilian Immigrants in Japan?” Center for Migration and Development, Princeton University, 2016.
31. 南波慧「「難民危機」と「危機に曝される難民」――違法化された移民と境界関連死の増加」日本 EU 学会、一橋大学、2016 年。
32. 中野裕二「フランスにおける移民の統合をめぐる問題と排外主義」日本平和学会、2016 年。
33. 中野裕二「「フランス的統合」の変容と共和国」日仏政治学会、2016 年。
34. 中野裕二「統合高等審議会報告書（1991～2013 年）にみる移民のフランス的統合（1）――「統合」をめぐる言説変化を中心として――」日本社会学会、2016 年。
35. Tanabe, Yoshimi, Anka-Idrissi, Naïma, & Dor Tal, “Postcolonial insights on feminist consciousnesses”, International workshop, Appropriating Feminism ? Feminism Entanglements with neoliberalism, Racism, International Politics and Military Interventions, Frankfort: Germany, 2016.
36. Satoru Namba, “How Europe invents Illegalized Immigrants: Readmission policy and North African States,” Workshop Co-organized by the Mediterranean Studies Group (Tokyo), Ionian University, Department of History (Corfu, Greece), and Region of the Ionian Islands, Ionian University, Greece, 2016.
37. Satoru Namba, “Border related Deaths in the European Borderlands: (Un)expected Consequences of the Europeanization of Migration Policies,” 4th International Workshop for Graduate Students of EU Studies in the Asia-Pacific, Chulalongkorn University, Thailand, 2016.
38. Chikako Mori (with Helene Le Bail) “Japanese immigration policies: is there a Japanese exception compare to recent immigration history in other OECD countries? Rethinking long term continuities and changes in immigration policies. Farm hands or brains wanted?”40th Annual Meeting of the Social Science History Association,2015.
39. 森千香子「フランスにおけるレイシズムの変貌」第三回レイシズム研究会、2015 年。
40. 森千香子「フランスにおけるレイシズムの新展開と争点――極右、反移民政策、イスラモフォビア」国家論研究会、2015 年。
41. Chikako Mori, “ La transformation des formes de marginalité urbaine et ses conséquences. Essai sur la flexibilité forcée dans les marges urbaines japonaises ”, Marges, territoires urbaines, circulations, Casa de Velazquez, 2015.
42. Tanabe, Yoshimi, “Je suis pas féministe ! Femmes des quartiers populaires entre pratiques et désignations”, 7e Congrès international des recherches féministes dans la francophonie, Montréal : Canada, 2015.
43. Tanabe, Yoshimi & Anka-Idrissi, Naïma, “Les imbrications sexisme/racisme dans les contextes coloniaux et post/dé-coloniaux : les relais du pouvoir”, International conference Impossibles et Possibles. 2005-2015. Résonnances et Résistances, Saint-Denis: France, 2015.
44. 南波慧「欧州の防波堤としての北アフリカ諸国――国境管理の二重の外部化と再入国協定」移民政策学会、2015 年。
45. 浪岡新太郎「フランスに於ける統合政策とムスリムの立場」社会デザイン学会公開講演会「いまあらためて社会デザインを考える」、2015 年。
46. 浪岡新太郎「フランスにおけるムスリム女性の「問題化」」日本国際政治学会、2015 年。

〔図書〕（計 21 件）
1. 森千香子、岩波書店、ヨーロッパ・デモクラシー 危機と転換（宮島喬・木畑洋一・小川有美編）、全 296 頁（197-222 頁）、2018 年。
2. 森千香子、ミネルヴァ書房、外国人移民排外主義のダイナミズム（印刷中）、2018 年。
3. 園山大祐、明石書店、現代フランスの教育

改革、全 368 頁（110-128 頁）、2018 年。
4．園山大祐編、勁草書房、フランスの社会階層と進路選択 学校制度からの排除と自己選抜のメカニズム、全 317 頁、2018 年。
5. 中野裕二、岩波書店、ヨーロッパ・デモクラシー　危機と転換（宮島喬・木畑洋一・小川有美編）、全 296 頁（41-76 頁）、2018 年。
6. 浪岡新太郎、岩波書店、ヨーロッパ・デモクラシー　危機と転換（宮島喬・木畑洋一・小川有美編）、全 296 頁（133-164 頁）、2018 年。
7. Tanabe, Yoshimi, « De l'antiracisme au travail de mémoire : Le changement de conscience politique au Tactikollectif » in Nasri, Foued et Hadj Belgacem (dir.), Samir, La Marche de 1983. De la mémoire à l'histoire d'une mobilisation collective, Presse Universitaire de Paris Nanterre, 2018, pp.64-82.
8. Chikako Mori, Social Housing and Urban Renewal: A Cross-National Perspective (Paul Watt and Smets Peer, Eds.). London: Emerald, 499 p. (pp.277-309), 2017.
9.　園山大祐、明石書店、移動する人々と国民国家、全 208 頁（99-118 頁）、2017 年。
10. 浪岡新太郎、行路社、政治と宗教のインターフェイス、全 287 頁（146-184 頁）、2017 年。
11．森千香子、東京大学出版会、排除と抵抗の郊外――フランス＜移民＞集住地域の形成と変容、全 304 頁、2016 年。
12．森千香子、法政大学出版局、承認―社会哲学と社会政策の対話、全 433 頁（362-394 頁）、2016 年。
13．森千香子、勁草書房、教育の大衆化は何をもたらしたか、全 326 頁（257-275 頁）、2016 年。
14.Chikako Mori, Mouvements sociaux des années 2010. Quand l'acteur devient le sujet (Geoffrey Pleyers, Brieg-Yann Capitaine dir..), Editions de la Maison des sciences de l'Homme, 288p. (pp.217-227), 2016.
15．村上一基、勁草書房、教育の大衆化は何をもたらしたか、全 326 頁（234-256 頁）、2016 年。
16．村上一基、法政大学出版局、承認―社会哲学と社会政策の対話、全 433 頁（395-400 頁）、2016 年。
17．森千香子、彩流社、ジェンダーにおける「承認」と「再配分」―格差、文化、イスラーム、全 314 頁（269-291 頁）、2015 年。
18．田邊佳美、勁草書房、排外主義を問いなおす――フランスにおける排除・差別・参加、全 272 頁（123-125 頁）、2015。
19. Tanabe, Yoshimi, Invisible Cultures: Historical and Archaeological Perspectives (Gheller, Viola and Francesco Carrer ed.), Cambridge: Cambridge Scholars Publishing, 2015, 315p. (pp.16-47).
20. 浪岡新太郎、勁草書房、排外主義を問いなおす――フランスにおける排除・差別・参加、全 272 頁（91-122 頁）、2015 年。

６．研究組織

(1)研究代表者

森 千香子　（Mori Chikako）
一橋大学大学院・法学研究科・准教授
研究者番号：10410755

(2)研究分担者

中野　裕二（Nakano Yuji）
駒澤大学・法学部・教授
研究者番号： 10253387

園山　大祐（Sonoyama Daisuke）
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：　80315308

浪岡　新太郎（Namioka Shintaro）
明治大学・国際学部・准教授
研究者番号：　40398912

(3)研究協力者

村上　一基　（Murakami Kazuki）
東洋大学・社会学部・非常勤講師

田邊　佳美　（Tanabe Yoshimi）
パリ第 13 大学・社会学部・博士課程

南波　慧　（Nanba Satoru）
一橋大学大学院・社会学研究科・博士課程